

今日の説教のポイント <創世記1章1-5節>

①神様が世界を造られた。私たちが生きていける根拠はそこにある。

聖書の最初は創世記です。その名の通り、神様が6日間で世界を造られる様子から始まります。「え、6日間で?!」と驚く必要はありません。聖書は科学書ではありません。信仰書です。小学生が夏休みに書く“あさがお観察日記”とは違います。神様が世界を造られるのを横で観察して書いたのではないのです。そのことは書いた人もそれを読む人も分かっていました。神様を信じる人々がそれを通して何を伝えようとしているのかを考えて読まなければなりません。創世記一章で一番伝えなかったこと、それは、「世界は偶然にできたのではない。神様が造られたのだ」ということです。

人生がうまくいっている時には、「そんなこと自分に関係ない」と思います。しかし事が起こり、八方塞になり、自信も萎え、どうしていいか分からなくなった時に、このことが持つ大きな意味が立ち現われて来ます。「あなたは私が生きるように造った存在なのです。あなたが生きていい、また生きていけるということの理由はそこにあるのですよ」、創世記一章の一番大事なメッセージはこのことです！ 創世記を最後にまとめたのはバビロン捕囚の中にあつた人たちです。信仰を失っても不思議ではない状況にある彼らが見出して支えられたもの、それがこの創造者なる神様への信仰だったのです。

②語られる神様。造られたものはそれを聞くことが期待されている。

創世記一章でも際立った特徴は、神様が「～あれ」と言われるとそのようになった、と記されていることです。何を意味しているのでしょうか？ ①で指摘した神様の存在自体をまず考えていいでしょう。神様が存在しておられるから語りかけがあつたのだということです。神様はおられるのです！ 二つ目に、「言われた」ということは、それを「聞くもの」が想定されているということです。神様が存在させられたものは聞くことを期待されているのです。「聞く」とは日本語でもそうであるように、ヘブル語でも「従う」も意味します。造って下さった神様に聞きながら生きる。それが神様が私たちに与えて下さった道なのです。その道から外れる時に、私たちに恐れや不安が訪れるのです。道から外れた時は、早く正しい道に立ち帰る、それが道に迷った時の鉄則です。教父アウグスチヌスも、「神以外の知恵を求め続けたが、神様に立ち帰った時に平安を得た」と語っています。